端役登場の文体

——王命婦から小侍従へ——

加藤宏文

はじめに

源氏物語には、大きな「かくろへごと」が、ふたつある。ひとつは、藤壺の宮と光源氏との間のそれであり、いまひとつは、朱雀院の女三の宮と衛門の督柏木との間のそれである。

このふたつには、「場面の転用」[注1]の関係が、見てとれる。まずは、当事者を仲立ちする女房[注2]それぞれの、造型ぶりにである。すなわち、前者では、宮付きの女房王命婦の、後者では、宮の乳母子で[注3]柏木の乳母の姪小侍従のである。

このふたりは、一見似通った役を演じている。しかし、前者を念頭に置いた後者の造型ぶりには、その「視点」[注4]において、似而非なるものがある。本稿では、その観点から、つぎの四つの面で、両者登場の文体を比較する。

①　密事の発端をとらえる視点
②　素性や性格をとらえる視点
③　「草子地」との接点での視点
④　内面をとらえる視点

王命婦から小侍従へ。——こう比較される。

一　密事の発端をとらえる視点

まず、前者では、「せめありく」（光源氏）——「たばかる」（王命婦）＝若紫巻、つぎに、後者では、「いひ励ます」（柏木）——「うかがひつく」（小侍従）＝若菜上下巻、の視点に、注目をする。

○　内裏にても里にても、昼は、つく〴〵とながめ暮らして、暮るれば、王命婦をせめありき給ふ。（若紫巻＝日本古典文学大系＝以下同じ。一―二〇五）

「せめありく」の用例は、物語中他にない。

ただし、「せむ」の用例は、四三ある。当事者の関係によって分類すると、こうなる。

㋑　男（方）が、女付き女房などを。(12)
㋺　女付きの女房などが、女を。(9)
㋩　男が、女を。(6)
㋥　男同士。(6)
㋭　舞・曲の演奏にまつわって。(5)
㋬　その他。(5)

中で、㋑・㋺・㋩が、密事にかかわる。話者の視点がとらえる人物関係は、こうである。

たとえば、各類型の例は、こうである。

㋑ 秋の頃ほひ、しづかに思しつゞけて、かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しうおぼし出でらるゝまゝに、常陸宮には、しばしば、きこえ給へど、なほ、おぼつかなうのみあれば、世づかず心やましう、「負けてはやまじ」の御心さへそひて、命婦を責め給ふ。（末摘花巻同一—二四四）

（注「命婦」は、「大輔命婦」。）

㋺ 御硯などまかなひて、責め聞ゆれば、しぶしぶに書い給ふを、とりて、忍びて、宵のまぎれに、かしこにまゐりぬ。（柏木巻同四—一四）（注 小侍従が女三の宮を。）

㋩ 人ざまの、わららかに、け近くものし給へば、いたくまめだち、心し給へど、なほ、をかしく、愛敬づきたるけはひのみ、見え給へば、兵部卿(の)宮などは、まめやかにせめ聞えたまふ。(蛍巻同二—四二〇)（注 蛍兵部卿の宮が玉鬘を。）

つぎに、柏木「いひ励ます」の場合を見る。

○ …と、常に、この小侍従といふ御乳主を、いひ励まして、「世（の）中定めなきを。おとゞの君、もとより本意ありて、おぼしおきてたるかたに、赴き給はゞ」と、たゆみなく思ひありきけり。（若菜上巻同三—三〇三）

「いひ励ます」の用例は、他にひとつある。

○ ……とねたげにいふに、腹だゝしくなりて、憎げなる事どもを、言ひはげまし侍るに、女も、えをさめぬすぢにて、指ひとつを引き寄せて、くひて侍りしを、おどろおどろしくかこちて、……（帚木巻同一—七二）

他に「聞え励ます」の用例が、ひとつある。

○ …三（の）宮の、「かやうに奥まりたらむあたりの、見まさりせむこそ、をかしかるべけれ」と、あらましごとにだに、のたまふものを、「聞え励まして、御心騒がしたてまつらむ」とおぼして、のどやかなる夕暮に、まゐり給へり。（橋姫巻同四—三二五）（注 薫が匂宮を。）

なお、他に「はげます」の用例が、四つある。中で、男女にかかわるのは、こうである。

○ 「……そのかはりに、いかう仕うまつるべうなむ、心ざしを励まして、今日は、いと、ひたぶるに、しひて侍ひつる。……」など、いと、よげに言ひつゞく。（玉鬘巻同二—三三六）

（注 肥後の監の発言。）

一方、王命婦と小侍従は、どう応えるか。

まず、王命婦「たばかる」の場合を見る。

○ いかゞ、たばかりけん、いとわりなくてみたてまつる程さへ、うつゝとは思えぬぞ、わびしきや。（若紫巻同一—二〇五）

＜表1＞

対象人物	視点人物
王命婦（大輔命婦2）	光源氏
玉鬘女房	蛍兵部卿
	鬚黒
弁御許	鬚黒
小侍従	柏木
落葉女房	大和守
少将君2	夕霧
浮舟母	左近少将
侍従	時方
少将尼	中将

（㋑の12例）

＜表2＞

対象人物	視点人物
末摘花	女房たち
斎宮	女房
女三宮	小侍従
中君	大君
浮舟4	妹尼
浮舟	少将尼

（㋺の9例）

＜表3＞

対象人物	視点人物
朝顔	光源氏
玉鬘	蛍兵部卿
玉鬘	鬚黒
落葉	夕霧
大君	薫
中君	

（㋩の6例）

「たばかる」の用例は、三八ある。当事者の関係によって分類すると、こうなる。

㋑ 女付きの女房が、女を。(11)
㋺ 男の従者が、女(方)を。(8)
㋩ 男が、女を。(2)
㋥ 男女関係以外の個人を。(9)
㋭ 局面一般を。(8)

中で㋑・㋺・㋩が、密事にかかわる。話者の視点がとらえる人物関係は、こうである。

<表4>

対象人物	視点人物
藤壺4	王命婦
末摘花	大輔命婦
女三宮2	小侍従
大君	弁たち
浮舟	右近
浮舟2	侍従

(㋑の11例)

<表5>

対象人物	視点人物
空蝉4	小君
夕顔	惟光
浮舟	道定
浮舟	時方
侍従	時方

(㋺の8例)

<表6>

対象人物	視点人物
空蝉	光源氏
藤壺	光源氏

(㋩の2例)

たとえば、各類型の例は、こうである。

㋑ 命婦も、たばかり聞えん方なく、みやの御けしきも、ありしよりは、いとゞ、うきふしに思しおきて、心とけぬ御気色もはづかしう、いとほしければ、なにのしるしもなくて、すぎゆく。(紅葉賀巻同一―二七七)

㋺ 「まづ、時方、いりて、侍従に逢ひて、さるべき様に、たばかれ」とて、つかはす。(浮舟巻同五―二六八)

㋩ 心深く、たばかり給ひけむ事を、知る人なかりければ、夢のやうにぞ、有(り)ける。(賢木巻同一―三八三)

つぎに、小侍従「うかがひつく」の場合を見る。「うかがひつく」は、計二例にすぎない。

○ 「いかに〳〵」と日々に、責められ、困じて、さるべき折うかがひつけて、消息しおこせたり。(若菜下巻同三―三七一)

○ 「……ともかくも、かき紛れたる際の人こそ、かりそめにも、たはやすき物忌・方違の移ろひも、かろ〴〵しきに、おのづから、ともかくも、物の際をうかゞひつくるやうもあれ」など、思ひ、やる方なく、……」(若菜上巻同三―三一二)

他に、「うかがひありく」と「うかがひ来」および「うかがひ尋ぬ」の用例が、それぞれ、順に、三、一、一ある。例示は、割愛する。

また、「うかがふ」の用例が、五つある。その人物関係、および用例は、こうである。

<表7>

対象人物	視点人物
朧月夜	良清・惟光
朧月夜	光源氏
光源氏	夕顔の使い
光源氏	頭中将
(文)	夕霧

○ 「かの有明、出でやしぬらん」と、心も空にて、思ひ至らぬ隈なき良清・惟光をつけて、うかゞはせ給ひければ、……」(花宴巻同一―三〇八)

○ 女も、いと怪しく、心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、あか月の道をうかゞはせ、「御ありか見せん」と尋ぬれど、……(夕顔巻同一―一三六)

このように見ると、ふたつの発端をとらえる視点には、相違がある。すなわち、かかわる語彙の用例体系でのそれである。王命婦のは、体系の規範の制約を受け、小侍従のは、むしろ、小体系をさえ

打ち破っているやに見える。

まず、「せめありく」。この語彙自体は、稀少語である。しかし、この背後には、四三例のつくりなす「せむ」を基本とした体系と、その規範とが、しっかりとある。さきの〈表〉および類型別の例で、吟味した通りである。

つぎに、「いひはげます」。この語自体も、稀少語である。しかも、この場合は、「はげます」を基本とした体系すら、七つの構成要素を持つにすぎない。稀な視点によると言える。

また、「たばかる」および「うかがひつく」についても、順に、右のふたつと同様である。

「せめありく」――「たばかる」、「いひ励ます」――「うかがひつく」。ふたつの密事の発端をとらえる視点は、このように、「作者」の語彙選択にかかわって、まずは峻別されている。

二　素性や性格をとらえる視点

さて、ふたつには、王命婦、小侍従両人の素性や性格をとらえる視点に、注目をする。

まず、王命婦については、小侍従とほぼ同回数の登場を見ながらも、それらの点は、欠落し、役割と時々の心情が紹介のみされる。この事実は、両者の似通った役割と身分とからすれば、一見不思議な相違である。初登場の場面で話者の言う「あさましかりし」が、その欠落の意味を形式的に示すと見れば、事は単純である。しかし、実態は、視点にある。

すなわち、すでに説かれるように[注5]、女房存在の現実における重要性は、物語世界でのそれとは別次元としたとき、浮かび上がる「作者」の視点である。そう「欠落」している。

それに比べて、小侍従の場合は、非常に具体的である。とりわけ、その素性の紹介は、以下に見るように、物語の展開に応じて、その時々に、便宜上増幅されてさえいったふしがある。つぎの二個所が、それに当たる。

○　なほ、かの、したの心忘れぬ、小侍従といふ語らひ人は、宮の御侍従の、乳母の女なりけり。その乳母の姉ぞ、かのかむの君の乳母なりければ、早くより、けぢかくきゝたてまつりて、まだ、宮、をさなくおはしまし時より、いと、清らになむおはします、みかどのかしづきたてまつり給ふさまなど、聞きおきたてまつりて、かゝる思ひも、つきそめたるなりけり。かくて、院も、はなれおはします程、人めすくなう、しめやかならむを、推し量りて、小侍従むかへ取りつゝ、いみじう語らふ。

（若菜下巻同三―三六六）

○　……と、の給へれば、このひとも、童より、さるたよりありて、まゐり通ひつゝ、見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心のみこそ、うたておぼえ給へつれ、「今は」と聞くは、いと悲しくて、泣く〳〵、……（柏木巻同四―一二）

すなわち、前者では、初出の三の宮の「御乳主」（若菜上巻同三―三〇三）小侍従は、実は、母方の系において、柏木と三の宮との結びつきの必然性の一端を、以前から担わされていたことが、ここで初めて明かされる。大きくは、宇治十帖への糸口がつけられもする。

一方、この小侍従は、柏木の要求を拒みつづける。ところが、話者は、突然、彼女を、「物深からぬわか人」（若菜下巻同三―三七〇）と指弾するのを境に、態度の急変を語る。事は、三の宮懐妊へと急転していってしまう。

かくして、困惑、悔恨、嘆きへと屈折していく彼女は、さらに、もう一度、その対応ぶりに、大きな変化を見せる。それを理由付けるのが、後者の素性紹介ぶりである。これもまた、宇治十帖での弁の御許を支えていく。

このように、小侍従の素性をとらえる「作者」の視点は、王命婦の場合とは、具体的に異質である。この事実は、藤壺物語と柏木物語との本質の違いからの必然であると同時に、その違いを逆に支える物語内の現実でもある。

さらに、小侍従については、その性格もが、実にリアルな視点でとらえられている。

○　……といえば、いふかひなく、はやりかなる口ごはさに、え言ひはて給はで、「……」との給へば、「……」と、はちぶく。
（若菜下巻同三―三六八）

まず、「はやりかなり」は、物語中に一二例を見る。うち、七例が、つぎの表のような、かなり限定された視点でとらえられている。対象人物も、また、限られた女房層である。他に、男のさま三、歌舞のさま二の例がある。

＜表8＞

対象人物	視点人物
賢女	藤式部
末摘花の侍従	話者
小侍従の手	話者
小侍従	話者
女房	話者
浮舟の乳母	話者
浮舟（-ならず）	薫

つぎに、「口ごはさ」（「口ごはし」）は、同じく二例を見るにすぎない。他の一例は、葵巻の車争いにおける、六条御息所の供人にかかわる。「これは、更にさやうに、さしのけなどすべき御車にもあらず」と「手触れさせ」ない供人のさまをとらえている。（葵巻同一―三二一）生々しい人物像が、重なり合ってくる。

また、「はちぶく」も、同じく二例を見るにすぎない。他の一例は、松風巻での大井の宿守が、明石の入道に呼びつけられて、「鼻などうち赤めつつ」（松風巻同二―一九三）、ひたすら保身のための弁解にこれ努めるさまである。

さらに、「腹立つ」（若菜下巻同三―三七〇）は、一七例を見る。しかし、その主体は、つぎのようである。

○　明石入道、紫上（2）、近江君（2）、鬚黒の北の方の母、小侍従、按察大納言（3）、匂宮、浮舟の母、常陸守、指喰の女、雲居の雁、中君の女房・少将君、人一般

一風変わった人物の、具体的なさまが、多い。

そして、小侍従の対応ぶりを、決定的に急変させた理由が、「物深からぬ」であった。

○　……と、いみじき誓言をしつゝ、のたまへば、しばしもこそ、いと、あるまじきことに、いひ返しけれ。物深からぬわか人は、人の、かく、身にかへていみじく思ひのたまふを、えいひ果てで、……（若菜下同三―三七〇）

「ものふかし」の用例は、物語中に二三例を見る。かかわっての、視点人物と対象人物との一覧を、否定例、肯定例（一例は、物理的な意味の例）別に示すと、＜表9＞＜表10＞のようになる。否定例における女三の宮側の宿命が、中で、際立って見えてくる。
視点の特質でもある。

このように見てくると、小侍従の性格を如実に表す語彙には、第一節同様、具体的な特徴がとらえられる。すなわち、物語中でも、稀にしか見られない視点にかかわるもの、限られた人物に多く注がれる視点にかかわるものが、とらえられる。王命婦とは、異なる。

<表9>

対象人物	視点人物
藤壺	話者
光源氏2	話者
朝顔君	女房
空蝉	光源氏
朱雀帝の手	光源氏
柏木	夕霧
八宮の手	若き供人
中君	話者
薫	大君
八宮の薫	匂宮
大君	女房
薫	弁
薫	話者
薫	浮舟

（肯定例）

<表10>

対象人物	視点人物
夕顔	話者
若き人々	話者
冷泉帝	話者
女三宮	薫
小侍従	話者
女三宮	光源氏
女三宮女房	話者

（否定例）

つまり、ここには、藤壺物語の中で、密事をつくり出し運びゆく役割が、当事者、すなわち藤壺の宮や光源氏の視点でとらえられている王命婦との違いがある。ちなみに、場面における視点人物たりえるのは、王命婦三四場面中四であるのに対して、小侍従のそれは、三六場面中一二に及ぶ[注6]。そのことによっても、小侍従は、すでに第二部から第三部への物語構築の上で、自律的な性格を与えられている。右に見た稀少語のありようは、その表れでもある。

三　草子地との接点での視点

また、三つには、いわゆる草子地との接点での、両人をとらえる視点に、注目をする。

まず、王命婦にかかわっては、顕著に、一一例もが指摘できる。ちなみに、小侍従にかかわっては、後述のように、二例にすぎない。しかも、注目すべきは、右の一一例のうち、詠歌にかかわる場面でのそれが、六例にわたる。中でも、三例は、王命婦自身の詠歌にまつわるもので、その視点は、具体的である。

○（光源氏の歌略。）あまりわか〳〵しうぞあるや。王命婦、

年暮（れ）て岩井の水も氷とぢ
見し人かげのあせも行（く）かな

そのついでに、いと多かれど、さのみ、書き続くべき事かは。……おぼしめぐらさるべし。（賢木巻同一―三七八）

すなわち、光源氏の歌の調べを、「わか〳〵しう」と評した話者は、つぎに、王命婦の歌を通して、桐壺院崩御直後のさまと心とを示す。そして、視点は、突然、さきほどの話者自身とは[注4]異質の「筆録者」のそれへと転換をする。つまり、王命婦の歌紹介の一事が、「そのついで」に「いと多か」った、さまざまな歌群の紹介を割愛させる。自制作用が見える。

○ 命婦の君、御供になりにければ、それも、心深うとぶらひ給ふ。くはしう言ひつゞけむに、こと〴〵しきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かやうの折こそ、をかしき歌など、出で来るやうもあれ。さう〴〵しや。……あるまじき事なりかし。（賢木巻同一―四〇二）

すなわち、王命婦は、藤壺の宮の供をして尼となる。光源氏は、彼女をも「心深うとぶら」う。そこで、話者は、[注4]「伝承者」の存在を前面に急に押し出してくる。「くはしう言ひつゞけ」ず「漏らし」たことを一度は肯定する。

ところが、ひきつづく一文は、「さう〴〵しや」と、批判的に本心を吐露する。詠歌の世界が、さきの自制作用の限界をも示している。

○御返（り）は、「さらに、えきこえさせやり侍らず。御まへには啓し侍りぬ。心ぼそげに思し召したる御気色もいみじうなん」と。そこはかとなう心の乱れけるなるべし。

「咲きてとく散るは憂けれど行くはるは花の都を立ちかへりみよ　時しあれば」

と聞えて、名残も、あはれなる物語をしつゝ、ひと宮のうち、忍び泣きあへり。（須磨巻同二—二七）

ここでは、光源氏へ、王命婦が「御返（り）」をする。右は、話者の、彼女の内面についての推し量りの一文を含む。彼女の歌がつづく。

このように、王命婦は、草子地と多くの接点を持つ。彼女の登場は、とりわけその詠歌を通して、物語の世界のあらぬ展開に、ひとつの限界を確認させる役割を担う。とりわけ、右のうちはじめの二つの場面は、王命婦とその詠歌にかかわっての、典型的な草子地を見せる。

一方、小侍従にかかわる草子地は、つぎの二例だけである。質的にも、前者とは異なる。

○さまでもあるべき事なりやは。（若菜下巻同三—三七一）

○心やすく、若くおはすれば、なれ聞えたるなめり。（若菜下巻同三—三九四）

ひとつは、小侍従が、柏木を女三の宮のもとに「すゑ」たことに対しての、「さまでも」との、話者の非難の視点からの発言である。これは、いわば、密事の決定的瞬間について、その重さを指弾し、小侍従の果たしてしまった役割を明らかにする。王命婦の場合とは違って、彼女自身を鋭く照射する視点が、直接、物語の展開の方向を、見事に示しえている。

もうひとつは、小侍従の、女三の宮への対応ぶりについての言及である。すなわち、これも、また、女三の宮方の性格の本質を道破するという点で、柏木物語の悲劇の原因の一半を示しえている。さきの、「物深からぬ」世界の典型としての造型につながるものである。

四　内面をとらえる視点

さらに、四つには、両人の内面をとらえる視点に、注目をする。この視点は、①地の文、②会話文、③内話文、④文（ふみ）の文　に現れている。

まず、地の文の場合は、さらにこう分かつ。

㋑心情どまりの視点
㋺心情から動作をもとらえる視点
㋩心情から事態をとらえる視点

中で、王命婦については、一三例が、ほぼ㋑（六例）と㋺（五例）とに二分される。

㋑宮も、その名残、例にもおはしまさず、かう、ことさらめきて、こもりゐ、おとづれ給はぬを、命婦などは、いとほしがり聞ゆ。（賢木巻同一—三八七）

㋺……はてはては、御胸をいたう悩み給へば、近う侍ひつる命婦・弁などぞ、あさましう、見たてまつりあつかふ。（賢木巻同一—三八三）

㋩命婦も、思ふに、いと、むくつけう、わづらはしさまさりて、更に、たばかるべきかたなし。（若紫巻同一—二〇八）

それに対して、小侍従については、一四例中一二例が、㋺の場合である。

㋑　小侍従、みつけて、「昨日の文の色」と見るに、いみじく、胸つぶつぶと鳴る心ちす。（若菜下巻同三—三九二）

㋺　……かつは、いと、うたて恐ろしう思へど、あはれ、はた、え忍ばず、この人も、いみじう泣く。（柏木巻同四—一六）

㋩　……と、のたまふに、いと、きこえんかたなし。（若菜下巻同三—三九三）

このように、地の文での、両人の内面をとらえる視点を比べると、大きな違いがわかる。すなわち、㋑から㋺への移向と言えようか。小侍従は、王命婦とは異なり、内面にかかわっても、その動作が、具体的にとらえられる。

つぎに、会話文の場合は、文数の多少に、大きな違いが、まずはある。こうである。

○　王命婦（九例）

㋑一文（五例）、㋺二文（三例）、㋩三文（一例）

○　小侍従（一二例）

㋑一文（一例）、㋺二文（三例）、㋩三文（五例）、㊁四文（二例）、㋭六文（一例）

まず、二文の例同士を比べてみる。

○　「など、かうしも、あながちにの給はすらん。今おのづから、見たてまつらせ給ひてん。」（紅葉賀巻同一—二八三）

○　「この人の、かくのみ、忘れぬものに、言問ひ、ものし給ふこそ、わづらはしく侍れ。こゝろ苦しげなる有様も「見給へあまる心もや、そひ侍らん」と、身づからの心ながら、知りがたくなん」（若菜上同三—三一三）

前者、王命婦の場合、二文の関係は、「非難」と「迎合」とである。別の例でも、たとへば、「苦慮」と「同情」となどである。それに対して、後者、小侍従の場合のそれは、「迷惑」と「自戒」とである。他に、「勧誘」——「理由」などもある。後者に、主体性が見てとれる。㊁や㋭の例が、それをより明かにする。

○　「人におとされ給へる御有様とて、めでたき方に、改め給ふべきにやは侍らん。これは、世の常の御ありさまにも侍らざめり。たゞ、「御後見なくて、たゞよはしくおはしまさんよりは、親ざまに」と、ゆづり聞え給ひしかば、かたみに、さこそ、思ひかはし聞えさせ給ひためれ。あいなき、御おとしめごとになむ」（若菜下巻同三—三七〇）

○　「あな、いみじ。かの君も、いといたくおぢ憚りて、「気色にても、漏り聞かせ給ふことあらば」と、かしこまり聞え給ひし物を。程だに経ず、かゝる事の、出でまうでくるよ。すべて、いはけなき御有様にて、人にも、見えさせ給ひければ、年ごろ、さばかり忘れがたく、恨み言ひわたり給ひしかど。かくまで思ひ給へし御ことかは。たが御ためにも、いとほしく侍るべきこと」（若菜下巻同三—三九三）

前者は、「拒否」——「事実」——「実情」——「非難」から成り、後者は、「非難」——「実情」——「規範」——「実情」——「反省」——「困惑」から成る。小侍従の主体性は、ここにもある。

また、内話文の場合にも、違いがある。

(1)　王命婦（三例）

「あやし」（若紫巻同一—二〇七）

(2)「あさまし」（若紫巻同一—二〇七）
(3)「ものはかなの御返（り）や」（須磨巻同二—二七）

小侍従（六例）

(1)「世の常のながめにこそは」（若菜上巻同三—三一三）
(2)「よき折」（若菜下巻同三—三七一）
(3)「昨日の文の色」（若菜下巻同三—三九二）
(4)「いで、さりとも、それにはあらじ。いといみじく。さる事はありなむや。かくし給ひてむ」（若菜下巻同三—三九二）
(5)「いふかひなの御さまや」（若菜下巻同三—三九三）
(6)「例は、無期にむかへすゑて、すゞろごとをさへ、いはせまほしうし給ふを、言少なにも」（柏木巻同四—一七）

まず、王命婦の場合は、いかにもそっけない反応を示している。(1)は、弁とともに、藤壺の懐妊に気づいたとき、(2)は、それを宿世ととらえたとき、(3)は、光源氏須磨行への、春宮のがんぜない反応を前にしたときである。

それに対して、小侍従の場合は、(1)・(2)・(3)は、王命婦に通じるが、違った例が目立つ。

そのひとつは、(4)で、光源氏が柏木の「昨日の文の色」を見つけたときの、当惑ぶりである。四つの文の曲折が、それをよく表す。

もうひとつは、(6)で、重篤となった柏木が、床にいざり入るのを見ての反応である。柏木の悲劇を、確かな視点で実感した内話である。

また、(5)は、王命婦の(3)と酷似の文型ではあるが、前提にある地の文の「いとほしきものから」を受けての、より深い心境である。

さらに、両人には、文（ふみ）の世界が、ひとつずつある。いずれも、歌が中心となっている。

○「見ても思ふ見ぬはたいかに歎くらんこや世の人の惑ふてふやみ　あはれに、心ゆるびなき御ことゞもかな」（紅葉賀巻同一—二八三）

○「一日は、つれなし顔をなん。「めざましう」とゆるしきこえざりしを、「見ずもあらぬ」や、いかに。あなかけ〳〵し」と、はやりかに走り書きて、「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと　かひなきことを」（若菜上巻三—三一四）

前者、王命婦の歌は、光源氏の追求に、兼輔の歌をふまえて答えたものである。ことばをも含めて、いかにも傍観者的にすぎない。

それに対して、小侍従における後者の視点は、「蹴鞠」の折の柏木と彼女との世界が、互いに独立していたことを示す。それだけに、歌そのものの主体性もが、保たれている。

おわりに

このように見てくると、両人のうち、小侍従の人物造型にかかわる「作者」の視点が、格段に生き生きとしていることがわかる。ちなみに、両人の退場ぶりも、興味深い。王命婦は、夜居の僧都の突然の登場に、とって代わられるにすぎない。それにひきかえ、小侍従は、その従妹・弁の御許[注3]の登場に引き継がれて、はるか宇治十帖の世界にまで、その存在は、語り継がれる。物語世界の要求である。

このことは、藤壺物語における「かくろへごと」と、柏木物語におけるそれとが、宿業としての脈絡を必然的に持ちながらも、異質であることと、表裏の関係にある。端役登場の文体は、主役のそれと相対的な関係にある。その要求に、「作者」は、さきの四つの面

での視点を区別し使い分けることによって、端役登場の文体のひとつの類型を創造し、応えた。

王命婦から小侍従へ。四つの面における「作者」の視点の違いから、文体の一端を見た。

注1　稲賀敬二先生『源氏の作者　紫式部』（新典社「日本の作家12」）

注2　島津久基『対訳源氏物語講話』（中興館）などでは、「乳母」とする。

注3　中野幸一「弁の君と女房たち」（有斐閣　講座「源氏物語の世界」第八集）の指摘は、ここにもあてはまる。

注4　拙稿「端役登場の文体――夕顔巻から玉鬘巻への右近の場合――」（「国文学攷」第九三号）

注5　篠原昭二「作中人物の眼と心と行動と　女房像の意義」（「国文学」学燈社第二二巻一号）

注6　付記のふたつの別表を参照されたい。

（一九八三・七・二一記）

＜別表1＞

巻名	場面番号	視点人物	王命婦の登場	備考
若紫	40	話者	①暮るれば、王命婦をせめありき給ふ。いかゞ、たばかりけん、（一・205・11）	「あさましかりし」
	40	話者	②命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集めもて来たる。（一・205・7）	
	42	命婦	③しるく見てたまつり知れる御乳母子の弁・命婦などぞ、（一・207・4）	
	44	話者	④命婦も、……更に、たばかるべきかたなし。（一・203・2）	方法なし。
紅葉賀	4	源氏	(1)御返(り)、……忍ばれずやありけむ。（一・273・1）	
	9	源氏	(2)例の「ひまもや」と、うかゞひありき給ふをことにて、（一・274・16）	
	13	兵部卿	③命婦・中納言の君・中務などやうの人々、対面したり。（一・276・11）	
	15	源氏 藤壺	④命婦も、たばかり聞えん方なく、……なにのしるしもなくて、すぎゆく。（一・277・9）	方法なし。
	23	藤壺	(5)人々めで聞ゆるを、（一・281・8）	
	27	命婦	⑥「……今、おのづから、見たてまつらせ給ひてん」（一・283・1）	約束。
	27	命婦	⑦「見ても思ふ見ぬはたいかに歎くらんこや世の人の惑ふてふやみ……」（一・283・11）	代わり返歌。
	28	話者	⑧いと侘しく、おもひの外なる心地すべし。（一・284・1）	
	31	源氏	⑨「たゞ、塵ばかり、この花びらに」（一・285・13）	藤壺返歌。
花宴	6	源氏	①かたらふべき戸口もさしてければ、（一・305・6）	
葵	61	源氏	①命婦の君して、……と御消息、きこえ給へり。（一・354・13）	
賢木	25	話者	①王命婦、年暮(れ)て岩井の水も氷とぢ見し人かげのあせも行(く)かな（一・378・12）	

	37	源氏	②近う侍ひつる命婦・弁などぞ、あさましう、見たてまつりあつかふ。(一・384・1)	「いかなる折にかありけむ、あさましうて、ちかづき参り給へり。」
	39	命婦など	③命婦などは、「いかにたばかりて、いだしたてまつらん。……」(一・384・14)	
	41	源氏	④明けはつれば、ふたりして、いみじき事どもを聞え、(一・386・15)	
	43	藤壺	⑤おとづれ給はぬを、命婦などは、いとほしがり聞ゆ。(一・388・1)	
	51	話者	⑥命婦のもとに、(一・394・7)	
	55	藤壺	⑦と、命婦して、きこえ伝へ給ふ。(一・397・12)	
	57	源氏	(8)大将殿より宮に聞え給ふ。(一・399・5)	
	60	源氏	⑨など、例の命婦して聞え給ふ。(一・401・10)	藤壺御髪おろす。
	62	源氏	(10)など、かたへは、御つかひの心しらへなるべし。(一・402・10)	
	63	話者	⑪命婦の君、御供になりにければ、(一・402・16)	命婦、尼となる。
須磨	26	女房たち	①「咲きてとく散るは憂けれど行くはるは花の都を立ちかへりみよ」(二・28・1)	命婦、藤壺の代わりとて、春宮付きとなる。
	32	話者	(2)宮には、(二・31・11)	
	34	藤壺	(3)御かへりも少しこまやかにて、(二・33・10)	源氏須磨下向。
	60	藤壺	④御乳母、まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる。(二・43・14)	
薄雲	23	話者	(1)親しきかぎり、さぶらひて、こまかにきこゆ。(二・229・8)	藤壺はて給ふ。
	30	僧都	②「さらに、なにがしと王命婦とよりほかの人、……侍らず。……」(二・234・12)	
	34	うへ	③うへは、王命婦に、くわしき事、問はまほしう思し召せど、(二・237・2)	
	36	源氏	④「……うへの御ためを、猶、思しめし嘆きたりし」(二・239・3)	

<別表2>

巻名	場面番号	視点人物	小侍従の登場	備考
若菜上	115	柏木	①と、常に、この小侍従といふ御乳主を、いひ励まして、(三・303・16)	「語らひつきにける女房」(三—303—10)小侍従か。
	127	話者	②と、胸痛く、いぶせければ、小侍従がり、例の、文やり給ふ。(三・313・1)	
	127	話者	③お前に、人しげからぬ程なれば、この文を、もてまゐりて、(三・313・9)	〈余裕・冗談〉
	127	話者	④「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと　かひなきことを」(三・314・12)	<無視>
若菜下	1	柏木	(1)「ことわり」とおもへど、(三・317・5)	
	70	柏木	②小侍従といふ語らひ人は、宮の御侍従の、乳母の女なりけり。(三・367・1)	(素性)乳母の姉、柏木の乳母
	71	小侍従	③小侍従、「あなおほけな。…かぎりなき御心ならむ」(三・368・3)	<たしなめ>

71	小侍従	④「いと、難き御ことなりや。……はやりかなる口ごはさに、（三・368・12）	＜拒否・皮肉＞
71	小侍従	⑤「……何しにまゐりつらん」と、はちぶく。（三・369・7）	＜拒否＞
71	小侍従	⑥「……あいなき、御おとしめごとになむ」と、はて〳〵は、腹立つを、（三・370・5）	＜立腹＞
71	小侍従	⑦物深からぬわか人は、……えいひ果てゞ、「……ひまをみつけ侍らむ」（三・370・13）	「小侍従変化」
72	小侍従	⑧日々に、責められ、困じて、さるべき折うかゞひつけて、消息おこせたり。（三・371・4）	＜実行＞
73	話者	⑨たゞこの侍従ばかり、ちかくは侍ふなりけり。「よき折」と思ひて、やをら、（三・371・15）	「さまでもあるべき事なりやは。」
95	源氏	(10)御乳母たち、見たてまつり咎めて、（三・387・10）	三宮懐妊
99	小侍従	⑪侍従ぞ、かゝるにつけても、胸うち騒ぎける。（三・390・1）	＜反省＞
100	小侍従	⑫「なほ、たゞ。この端書の、いとほしげに侍るぞや」（三・390・8）	
103	源氏	⑬小侍従、みつけて、「昨日の文の色」と見るに、胸つぶ〳〵と鳴る心ちす。（三・392・10）	
104	女房	⑭侍従、よりて、「昨日の物は、いかゞせさせ給ひてし。……」（三・393・1）	＜困惑＞（露見）
104	女房	⑮「いづこにかは、置かせ給ひてし。……」（三・393・6）	
104	女房	⑯いと、きえんかたなし。寄りて見れば、いづこのかはあらん。（三・393・12）	
108	柏木	⑰小侍従も、わづらはしく思ひ嘆きて、「かゝることなんありし」と、（三・398・4）	＜悔恨＞
109	柏木	⑱「……かつ、さぶらふ人に、心おき給ふこともなくて、……」（三・399・7）	＜嘆き＞

柏木

1	柏木	(1)かしこに、御文たてまつれ給ふ。（四・12・13）	
2	小侍従	②このひとも、童より、さるたよりありて、まゐり通ひつゝ、見たてまつり馴れ（四・13・8）	（素性）柏木方に
2	小侍従	③責め聞ゆれば、しぶ〳〵に書い給ふを、とりて、忍（び）て、（四・14・2）	
4	柏木	④やをら、すべり出でゝ、この侍従と語らひ給ふ。（四・14・16）	＜積極＞
5	小侍従	⑤泣きみ笑ひみ、かたらひ給ふ。宮も、……思したるさまを、かたる。（四・16・2）	
6	小侍従	⑥かつは、いと、うたて恐ろしう思へど、あはれ、はた、え忍ばず、（四・16・12）	
7	柏木	⑦と思ふが、あはれなるに、え出（で）やらず。……いみじう泣きまどふ。（四・18・1）	＜同情＞
37	源氏	⑧「この事、心知れる人、女房のなかにもあらんかし。…」（四・39・10）	源氏、小侍従を知らず。

橋姫	33	弁	①「……三条の宮に侍ひし小侍従は、「はかなくなり侍りにける」と、ほの聞き侍りし。……（四・319・13）	死
	48	弁	②「小侍従と弁と放ちて、また、知る人侍らじ。……」（四・332・1）	
	49	弁	③「…小侍従は、いつか亡せ侍りにけむ。「そのかみの若ざかり」と、…」（四・333・10）	
	50	薫	④「……侍従といひし人は、ほのかにおぼゆるは、……「にはかに、胸をやみて、…」（四・333・16）	薫、面識あり。
	50	薫	⑤「……「小侍従に、また、あひ見侍らむついでに、さだかに、伝へ参らせん」と、…」（四・334・6）	
	52	薫	⑥「侍従の君に」と、うへに書きつけたり。（四・336・2）	